

# 令和3年度第3回能勢町総合計画審議会及び地方創生推進委員会 議事録

【開催日時】令和3年1月28日（木） 午前10時00分～午後12時00分

【開催場所】浮るりシアター 小ホール

【出席委員】委員18名中16名出席の下、開催した。※順不同  
神吉紀世子、猪井博登、榎原友樹、尾下忠、野津俊明、中西信介、三浦勝志、中井正明、三浦瓈子、  
東亮一、中谷博、田中利明、大城桜子、久慈真里、八木修、東良勝

【欠席】

神出計、上西雅之

【事務局】百々総務課長、矢立政策推進係長、株式会社建設技術研究所（業務支援）

【協議事項】

- (1) 前回意見の振り返り
- (2) 住民アンケート調査結果の補足説明
- (3) 意見交換（グループごとに分かれて実施）
- (4) 全体総括
- (5) その他

・開会

・会長あいさつ

・議事

- (1) 前回意見の振り返り
- 会長) 資料説明の後、1時間くらいはグループディスカッションに時間を使いたい。前回の振り返り資料は、一回目であるのであまり意見分布がどうなのかとの事ではなく、話題の種類がどうだったかが重要。この話が抜けているとかがあれば述べて欲しい。基本構想の案を出し4月以降の基本計画をどう作るかとの議論も重要である。今後の我々の活動の仕方や計画の作り方を最後に議論して終わりたい。議事録は非常に細かく発言を記録しているが、いかがか、何か追加や修正は無いか。
- 異議無しとのことで、いったん議事録はできたとするのでよろしくお願いしたい。それでは、事務局から資料の説明をお願いしたい。

【事務局 資料説明 略】-質問無し-

会長) その他、委員から資料をいただいたので各自説明をお願いする。

委 員) 資料『ウォーキングのせ』について説明する。町民として知らなかつたことが明文されてゐる。

【資料口読 略】

銀寄は今や全国ブランドである。多くの方が買い求めて能勢町に来られる。

【資料口読 略】

非常に上手に広告に載せている。能勢町は気候が栗にあつてゐた。銀寄を日本にある世界農業遺産に3年ほど前に申請をした。残念ながら却下された。50年前ならよかつたが、ほとんどの栗山が放置され雑木林になり、やむを得ないと思っている。世界では50か所が農業遺産に登録され、日本では11か所となつてゐる。栗は成長が早い。ここ10年を目標にして、能勢町の栗銀寄を量産して再度申請が出来ればと思う。能勢栗増産課を設けて大切にしていくのはどうか。是非計画の中に入れもらって、能勢町倉垣の栗「倉垣銀寄」の説明や紹介を行い、特産品の奨励につなげていただきたい。ただ奨励されてもだれもやらないので、具体例を小冊子に入れてほしい。

会 長) 私も知らなかつた貴重な情報であった。感謝する。

委 員) 私がお配りした資料で世帯数は住基台帳から取つたもので、約4,600世帯となつてゐる。世帯分離している方もいるので個数は正確ではない可能性もある。空き家の比率はかなり変わつてきているのでご留意いただきたい。

会 長) 世帯数は感覚より多めに出るため、空き家の割合は小さく見えるが、資料のデータより実際は多いだろうとのことである。空き家の調査は非常に難しく、前回の議論で見たいとの意見が有り取り寄せていただいた。それではほかの資料の説明をお願いしたい。

(2) 住民アンケート調査結果の補足説明

【資料説明 略】

会 長) 非常に詳しい内容となっている。これについて意見はないか。興味深いと感じたのは、8ページで、24歳以下のほとんどが能勢高校の生徒との事で、1回外に出てみたいとの意見が見受けられ、進学などがあることを考えるとそれは理解できる。25歳から34歳の方が住みやすいことに肯定的とまでは言わないが、それほど否定的ではない。9ページを見ると、なかなかの数が「いずれ出ていく」となつてゐる。35歳から44歳の方の回答は暮らしやすさは否定的だか、25歳代よりもまだしばらくは転居しないとの印象を持った。25歳からの10年間と35歳の10年間で「暮らしやすさ評価」と「今後しばらくどうするか」が逆転することが面白いと思った。年齢層で事情があると思うので、能勢町の見える姿が年齢層で違うと思う。

委 員) 今回のアンケートでよくクロス集計されている。他の計画を作るときも様々な年齢層を対象にアンケートをとっていると思う。例えば子育て世代の子ども会のアンケートだと80%の回答率がある。介護保険の事ならば、高齢者の生の声が届いてゐる。近々では交通のアンケートもやられている。今パブリックコメントをしている地域福祉計画もアンケートを取つてゐる。総合的なアンケートだけでなく、他のアンケートも見てもらえたらどうか。細かくクロスしたら面白い。能勢町の実態が見えてくると思った。

会 長) 4月以降に、市場調査や部門別の施策の調査結果、現状で出ている部門別の調査結果をニュースレターにして委員の皆さんに見てもらうなどしても良いかもしない。交通の調査

をされているとの話が出たが実施しているのか。

委 員) 交通の調査は行っている。

会 長) 部局ごとに持っていると思う。分析が終わって公開できるならば、能勢町のデータ集とすると良いかもしない。4月以降考えてみたい。他にご意見はいかが。それではグループディスカッションを行う。

### (3) 意見交換

#### ■A グループ

会 長) 上西委員は欠席。5人でのディスカッションになる。前回はABCチーム共通した意見が出ていた。「人口が減る問題」「インフラ」「住宅問題」が多かった。今日は農業の話がでたので、前回話し合えなかった話題からでも切り口はどこからでも良いではじめていただきたい。

委 員) 能勢の栗のことを入れてほしい。一本でも多くの銀寄を植えること。栗は成長が早いので収穫が見込める。耕作放棄地が増えているのが問題か。

会 長) 栗山は能勢町にかたまって存在しているのか。倉垣が歴史を持っているのは聞いたがどこにでもあるものなのかな。どこの地区でも栗の木があると考えている私の認識はあっているか。

委 員) その通りである。能勢町は盆地になっており、栗の育成にむいている。近隣で考えると亀岡と川西には栗の木は無く、しかし篠山に行くと栗の木がある。おいしさは能勢が一番である。これを産業奨励として大事にしたい。目標として世界農業遺産に再申請してはどうかと思う。今は栗山も荒れてしまっている。でも能勢町のみんなで農業遺産の意識があればきっと復興できる。役場が旗振りをしないといけない。そうでなければ町民も意識が向かないし動かない。『能勢栗増産課』のような組織が必要ではないか。

会 長) 和歌山のみなべ町には梅の為の組織があるのは知っている。

委 員) なぜ銀寄は認定されてなかったのか。

委 員) 栗山が整備されている、されていないといような審査ではなく、栗山があったおかげで自然環境が守られている、動植物が生きていると言う評価が必要だった。能勢はその調和が取れていなかつたので駄目だった。

委 員) 10年後誰もやっていないなどの「続かない」ことも要因と聞いている。

会 長) 栗がおいしいとかだけでなく、自然とともにある栽培技術、これを奨励すると地球環境にとって良いのが世界農業遺産の根幹にあり、栗の産業がいかに持続性があるのか、自然にも調和しているかのエビデンスを出さねばならない。宮崎県の椎葉村で認定されている焼畑も、現在一軒の農家さんがやられているものが世界農業遺産に入っている。世界的には焼畑は自然破壊だが、日本の焼畑は自然調和とされている。持続性は現状危ういが、地域でがんばって守っている。今世の中で言われている「持続的な未来」に乗っていくことが必要である。栗山の環境や他の農業との循環についてなど示さなくてはならないので大変だとは思うが、目指すのは良い事だと思っている。能勢町も出来る気がする。

委 員) シンポジウムに参加した際、外の人間から見たときの、農家があり栗山が有り、能勢町の村の形式が他の地域と違うのが魅力的と言われていた。

委 員) きっかけの栗林は、畑として植えられてきたわけではない。家の裏が栗林になっていると

- ころが多い。残念ながら枯れて荒れてしまった。
- 会長) 10年かければ復活も望めるのか。
- 委員) 10年を目標に町で目指していけば、あるいは復活できるかもしれない。
- 会長) 能勢栗は本当においしい。能勢栗は実が大きくて剥くのが楽と言っていた。農業遺産に立候補の件は知らなかったが、能勢全体の自然が守られていることが良い話である。世界に向かたこのような農業のやり方が良いのではないかと言えると説得力が出る。栗以外の農産物でこういった物はないだろうか。(ない、との声)
- 委員) 自分の畑に銀寄の苗木を植えて育てるのもよいかと考えている。栗は成長が早いから収穫までの期間が短い。
- 委員) 昔の農家にとって米作りは命であった。米は1年で収穫できるし生活の糧だった。田は米作りをする場所であるので裏の山に栗を植える。斜面は水が張れないから栗の木を植えて土地利用していた。その栗の木が現在の里山を形成している。
- 会長) 泉州だとこれがみかんである。
- 委員) 能勢町は山の斜面に栗が植えられていたが、ここが耕作放棄地になっている。水はけのいい場所は少なくなったとはいえ幸いまだ残っている。放置された地区に銀寄を植えてはどうか。そこに杉やヒノキを植えたら違反になるが、栗は果実であるから農地法違反にはならない。役場の奨励があると動く人も出てくる。地元だけじゃなくて川西や豊能町からも募ったりしてもいいかもしれない。私たちのように年を経ている者も農業の現役はたくさんいる。シルバー人材として安くても賃金を出して栗の世話をしてもらうのも悪くないと思う。ボランティアなら栗の実がなるまで何日通ってくれたかで栗を報酬でお渡ししたりすると若い人も休みの日に来てくれるかもしれない。でもこれをやろうとしたら管理する人間がいる。それを『能勢栗増産課』の様な組織があれば運用できるのではないかと思う。
- 会長) 労務管理する人に加え、農業系のテレビ番組に協力している農業指導員のような立場の人が必要と思う。
- 委員) 銀寄は可能性があるかもしれない。ただ、生産力に関してだと少ない。
- 会長) 面積的に少ない。
- 委員) それに他の土地でも銀寄作っているところも見受けられた。
- 会長) たしかに、現在全国的に銀寄を作っているが、銀寄発祥の地であり、いかに能勢の銀寄がおいしいかとブランドでいくのはどうか。粒が大きいのはスイーツを作りたい人からすると強みである。
- 委員) 吹田の和菓子屋が能勢に自家製農家持っていての銀寄でお菓子作って売っている。
- 会長) 事業化されているところも少しづつだが出てきているように見受けられる。農業をどうするかの話は総合計画のどこかでやらないといけない。個人的に、能勢在住の年配の農業従事者の方はよく知つておられるのでノウハウ伝授が大切だと思う。地方創生でもおいしいものがたくさんあるとの話は以前から出ていた。5年前10年前に比べて能勢町に美味しいものがたくさんある情報を知っている人は大阪市内にも増えている。外から見ていると丹波のイメージが非常に良い。丹波のブランドイメージが丹波全体でみられてしまうところがある。「能勢栗」まで知っている人は土地の知識に造詣の深い人のみだと印象がある。食べたら絶対にファンになる能勢の栗をどう打ち出すか。
- 委員) アフターコロナの中で、農業をどう位置付けるか。SDGSをどうクリアしていくか。能

勢町の新規農業に約 30 人農業をしにきているが、その人たちがどのような思いで農業に従事されているのかなどいくつかのキーワードをむすびつけながら、既存の厳しい現状を考えなければならない。以前、三菱総研の調査したもので「生物多様性日本一」というデータがある。農業と里山をどうするのか考え、データをどのように位置づけて都市近郊の農業のキーワードとどうくっつけるかだと思う。

会長) まさに能勢町の市街化調整区域の問題である。都市計画区域なのにこれだけの自然環境が残っている。里山などのマイクロ農業がしっかりなされている。新型コロナ感染症の話は今後も続き、観光産業などは商売が止まっている状態である。しかし農業は止まっていない。密にならず自然環境が良いから、農業を止めたらまずいとまちづくりをしている所は多い。自給的な農業が大事、規模の小さな農家ほど大事である事が見えてきた。バリ島も有名な観光地だが、去年一年は軒並み観光がだめになり農業を止めなくて良かったとの話を聞いた。コロナで考え方か変わった。

委員) 分かりやすく大衆が求めている情報を提供しなくてはならない。田舎の農的暮らしを言われている行政は沢山あるが、「農的なくらし」はどういうものなのか、あまりにも抽象的である。

会長) 一般的に銀寄を調べたら愛媛県の方が多く出てくる。割合で言うと他所の方が情報量が多い。情報の多い少ないではなく遺産の方向で考えるなら良いと思う。ただとてもハードルが高い。食べること、自然との調和に対して関心が高く自分でも何かやろうと考えている人も多いと感じる。アンケートでは 25~34 歳の人が前向きとの結果もある。既に能勢町でいろんな調査をされている。テーマを決めてアンケート等の読み解く会を、委員ごとに担当を決めて分析するなどしないといけない。分析班、調査班など、4 月意向はテーマに突っ込んで 3~4 人ごとに調査するなどもしても良いと思う。栗山を視察するのもよいと思う。

委員) 農業センサスのアンケートに、後継者の設問はあるのか。

委員) 自然保護や環境も大切ではあるが、土地活用をしないと町も活性化しない、農地をどう活用するのかを議論している。アンケートでは 7 割の人が農業はできないとの結果となっている。誰か別の人には管理してもらいたい、貸したい、売りたいとの意見も多い。総じて自分たちでは土地を管理していくのは難しいとの意見があり、限界であると取れる。

委員) 「血縁だけでつなぐ」ことが前提となっている。新たに外の人を入れると別の話になる。新しいアイデアが無いか模索中である。

会長) 土地利用の開発許可緩和が近年行われたが、調整区域のしんどさは、血縁で繋げなければいけないことである。これがまったく緩和されていないのが全国で問題になっている。別の人でも良いのはないかとの意見が出ている。

委員) 法律が戦後のままであるのがこの話が進まない原因。やはり時代が変われば法律も緩和するべきである。

会長) 実態調査を持ちよって、集まってデータを見る会などをしてはどうか。専門別委員会でオーブンできるなら、おそらくインターネット等でまとまっているだろうから見ていくのもひとつ。

委員) (栗の生産システムについて) まずはトップを決めないといけない。旗振り役として、役場の職員を配置する。農業のベテランの専門家をアドバイザーにしボランティアの人に教え

る。来た日数により栗がもらえるなどメリットがあれば、来てくれるのではないか。例えば、土地所有者と役場との10年契約等があれば土地所有者は安心する。10年後は返してもらえ、土地所有者にもメリットなるようなシステムを考えるべきである。

会長) 最近は農業を学ぶとき、まず YouTube の農業系動画を視聴すると聞いた事がある。先人の知識や剪定堆肥の作り方など動画に残すプロジェクトも必要かもしれない。YouTube を使えばそこからファンは増えるかもしれない。地元の方は役場が出てきてくれたほうが安心してくれる。受け手の方は、役場が発信しても見ない。検索して自身の興味がある動画や情報なら若い人は偏見無しで純粋に価値として受け止めてくれる。一つのプロジェクトとしてはおもしろい。ただオリジナルが「能勢町である」と伝えることの難しさがある。銀寄を軸にするとした際、農業の就業の機会にもっとできる事があるのではないかとの模索と、能勢町の可能性が10年で伸びたことなども盛り込みたい。そして大阪府に国の制度を変えてもらう。府から力を貸してもらうために、地方創生としていいモデルを能勢町がやることを伝えたい。調整区域を潰すわけではない。これは守る側に必要な緩和である。そのようなことをしようとする、もちろん分析等が必要である。

会長) 他はどうか。10年前、小学校合併の話が決まっておらず意見を戦わせて沢山話し合い合併した能勢町はすごいと思っている。能勢のパワーを見た。新規就農の話のアプローチは10年前にはなかった。アプローチ法を考え、もっと沢山の人に来て欲しい。

委員) 農業に関しては行政も入ってきて協力してくれている。青年農業のつどい4Hクラブがある。そこが頑張ってくれている。4Hクラブは40名ぐらいの会員が居て能勢が最近高く評価された。

会長) この10年間、彼らがやってくれている。ぜひその方たちに話を聞きたい。

委員) 時間設定して4Hクラブの人に話をしてもらってはどうか。意見交換は重要である。

会長) 確かに話を聞いて実態を学ぶのも大切である。移住者を増やすには住民の人がアピールしてくださる事が一番効果的。だが全部頼るのではなく、住民からの話を聞いて委員である我々とともに作り上げていく必要がある。

委員) 30世帯の新規参入は全国的に見ても多いのではないかと思う。銀寄の話が今回出たが、農業だけではなく山の豊かさもある。

会長) 新規転入の方に話を聞いてはどうか。いわば移住の実践者である彼らは移住のハードルを越えて来られているから、リアリティのある話を聞けるのではいか。調査で見たら学生だと残りたい人は1割となるが、その1割それが大切。一人一人の積み重ねが全体を動かす可能性が能勢町にはある。350万都市のような大規模な計画では成しえない事ができる。住民の方に長時間拘束ではなくてテーマを決めて話を聞く機会を設けるのはどうかと考えている。テーマを決めて突っ込むことが大切。個々が持っている詳しい調査データの話も前半で出た。交通、農業、子育て、土地利用、介護のデータがある。このようにデータを取って見ても能勢町の全体を見渡せるのが良いところ。また、テーマにも繋がりはあると思う。例えば「子育て」と「銀寄」なども無関係ではない。その橋渡しがあると農業を支えようとするセクターと子育てセクターができる。そこを確立できれば新規移住も今以上に期待できる。銀寄で調べると愛媛県が検索に上がってくるとの件であるが、愛媛県は農業に対しての意識が非常に高い。でも銀寄の発祥の地はこの能勢町である。なぜ能勢町に良い栗が出来たのか。土が良いのか。気候か。

- 委 員) やはり土がいいと聞いている。真っ黒な栄養のあるいい地層が東に多い。西能勢はちょっと地質が違う。
- 委 員) もともとの地質が良い。
- 会 長) 似たような話として、泉州の水なすの話がある。貝塚じゃないといい味にならないと聞く、他にもっていっても成功しない。局所的に植物と地質の相性が合って美味しいものが出来る。
- 委 員) 別の地域に「まな」と言う野菜があるが、地域の特性による野菜もある。
- 会 長) 地域にしかできないものが大切。SDGs にもはまっている。
- 委 員) JA の参入でせっかくの土地の特産が価格暴落したりして、国がつぶしたような形の残念な結果もある。
- 会 長) 和歌山も完全に地元産業で、JA に出さず独自販売をしているところもある。
- 委 員) 特産品はそこにしかできないが、能勢は何でもできるので強みではないか。米もそう。
- 委 員) 農業にするブランドとして大阪産の名称はイメージがあまりよくないので、ブランド化するなら能勢産とすべきかもしれない。
- 会 長) 都市のイメージの強い大阪が農産物のブランドとしては足を引っ張る。確かに能勢産とはいいいアイデアだと思う
- 委 員) 次の回はどうするのか。
- 会 長) まとめなくとも良いので。来年度 4 月以降何をするか、どんな調査を行うのかの案出しをする。10 年前との差異などのまとめを行う予定でいる。

## ■B グループ

- 副 会 長) それではディスカッションを開始したい。前回議論できなかった話など、思われているところがあればお聞かせいただきたい。
- 副 会 長) まず私から一つある。私は計画が 2 つあると思っており、皆さんが「将来を見据えてこうやって行きましょう」ということと、「生活を守るためにこれをやりましょう」と言うような、「戦略的にやるもの」と「そうではないもの」の 2 つがあると思う。戦略的なものは、戦略やターゲットを絞り込もうという議論が出ている。生活をしっかりとしていくという議論については、これは絞り込むのではなく、皆さんのご意見を多く反映していくことと議論と思っている。そのような意味では少し性格が違うものを議論しなくてはいけない。人口の話は前回も出てきたが、人口は今後どうなるかわからないので、前提条件として考えなければならない。そのような意味では、例えば前半で出てきた「能勢栗」の農業を頑張っていこうということや、物流であるならば、それは本当に町民が望んでいるものなのか、ということを絞って考えなければならないと思う。戦略的に目標を絞り込むのか、前回でてきた人口は前提的なもので考えるのか、改めて議論したい。「これで困っているから、こう解決しましょう」という議論がいる。
- 委 員) 全体事項について、資料 1 「前回の振り返り」を見てみると、人口問題など、どうしても私たちが手に負えないものがある。これは事象であるので、具体的には自分に身近なものは何なのかということを理解する必要がある。
- 副 会 長) 前回の振り返りに関するご意見を頂いた。他にご意見はいかがか。
- 委 員) いろいろな問題があるが、前回に話題に出ていた川西物流センターの話がある。総合計画

ということなので、やはり企業誘致については明記しないといけない。そのような方向で議論する必要があるが、土地をどのように使うかを考える必要がある。土地開発としては、東山辺に国道がでて最短で舞鶴に行けるようになったことは非常に良いことである。

副会長) 戦略についてのご意見かと思う。計画を作るときにはソート分析というものを行うケースがよくある。ソート分析とは、実施する計画の「強み」「弱み」「機会」を書き出し、一旦分けてみる。そのような分析をして、戦略的に最も良いものを選んでいくという手法である。このようなことをしても良いかもしれない。

委員) 能勢町のキャッチコピーに「大阪のてっぺん」というものがあるが、とても良いと思っている。田舎への移住を考えている人に能勢町の魅力を発信して人口を維持、増加するなど、何か工夫ができないか。例えば、能勢電鉄さんや阪急電鉄さんに何かお願いできないか。北摂に住んでいる人なら能勢町のことを知っているが、大阪市内のは能勢町という地名は聞いたことがあっても町の事はあまり知らない。旅行者に働きかけて、なんばから能勢町への日帰りツアーのようなものを企画して能勢町の魅力をアピールし、町として能勢町の魅力発信ができないか。

委員) 川西市は物流誘致によってすごく変わるとと思う。やはり能勢町にも企業を誘致したらどうかと思う事がある。能勢町に合う企業とはどのような企業か、町の人はだいたいわかっていると思う。しかし、なんと言っても難しいことは中々誘致する土地が出てこない。また地権者が中々まとまらない。これも1つ課題と思っている。また、企業からは能勢町の人才の技能は高いが、今募集しても人が集まらないと聞いている。箕面方面からバスで来てもらっている。能勢町には人が居ないが箕面方面には働きたい人が居るという逆転現象が起こっている。前回の内容で能勢町の魅力は、やはり東京ではこんなに都市圏から近い環境のいい田舎はないということであるが、その魅力を発信出来てない。

空き家対策について、能勢町の空き家は少し特殊と考えている。豊能町方面の空き家は一般的な住宅の空き家が多い。しかし能勢町の空き家は古家の空き家が多く、退職された方が買っている。これを若い方にどのようにローンをつけていくかが課題と思っている。新名神高速道路がでてここ10年で大きく変わると考えている。舎羅林山の大規模開発地はバブル崩壊で止まっていたが、やっと動き出して活性化している。能勢町は地の利があるので、地方創生としてうまくリンクさせていきたい。

委員) 前回欠席で議事録を見させてもらった。印象としては机上の空論になっていると感じている。何かが障害になっているのではないか。できない部分があるという考えを能勢町の人は持っていると思う。果たして実際に能勢町の魅力をうまく発信していけるのか。商工会青年部があつて、わりと能勢町は有名である。キャッチコピーとして「大阪のてっぺん」は非常によい。恐らくずっと問題提起として挙がってきた話であるが、今の学校があるところに遊園地をつくろうとしたが、結局学校として落ち着いた。外から聞くと能勢町はわりと名前は有名で、逆に能勢町にずっと住んでいたらわからない事がある。企業の会長から能勢町は宝の山だと言っていた。では宝とは何かと聞いても残念ながら答えてくれなかつた。住んでいる人には、能勢町の魅力や財産がわからない。企業誘致についても、中々前に進まない理由として、何かが障害になっている。

副会長) 何が障害だと思うか。

委員) それがわからない。その障害を分析して原因を突き止め、障害物をとったら突破口が開け

るのではないか。

委 員) 私らも企業誘致をする中で、10,000坪ぐらい欲しいとよく聞いている。

委 員) そうすると、町自身の大きな開発になるのか。

委 員) 10,000坪を欲している方が多いが、土地はあるのに能勢町は動けない。情報が出てこないので土地の価格もわからない。動かせる土地が能勢町にはあまりない。あれば表に出せるが、それが出来ないことが問題である。それを言い値で買ってもらえたなら良いが、動かせる土地がどこにあるかと思ったら、あまりない。

委 員) いろいろな土地の問題があるが、関西電力も猪名川町に行ってしまった。関西電力が能勢町にあつたら税収も上がったのではないか。

委 員) ダムの話も私が子供の時にあったが、進んでいない。

委 員) 能勢町はプライドも持っているし、財産も持っている。今おっしゃったとおり、学校ができるまでは道路が渋滞していた。阪急交通さんのバスが走ればすごいまちになるのだなと思った。画期的な図をかかないと町は動かない。清水の舞台から飛び降りるくらいの覚悟でないといけない。能勢町は予算を今組んでいると思う。

委 員) 来月の町報を見られたか。ちょうど公共交通として、3,500万を出すとなっていた。

委 員) 阪急バスは減らしてはだめである。

委 員) 現況としては、なかなか厳しい状況である。

委 員) 能勢町は住民税が高いが、ある程度仕方がないと思う。税金の使い方に勇気や決断力がある。能勢町には宝の山があると聞いており、財力も各自にあると思う。希望や理想があるけど動けない。何か矛盾していると考えている。やはりアピールの問題ではないか。

委 員) 24歳以下の方のアンケート調査結果をみると、「働きたい企業がない」が最も多い。ではどんな企業に働きたいか聞いてみたい。

副会長) 今の大学生に聞くと、給料ではなく雇用条件がしっかりしている会社を選ぶ傾向にある。現在の安全志向の中で、若い人は冒険してくれるのか。

委 員) 若者が冒険してくれる環境を町が作れないか。

委 員) 町民は従順で誠実であると思う。行政主導で何か画期的なプロジェクトを実施してくれればよい。

委 員) 逆にほかのところから来てくれたら、当たり障りがない。

委 員) 先ほどあったご意見で、古民家に移住するとなった場合、やはり勇気がいる。町が間に入って、賃貸で情報を出すなどの工夫が必要である。そうすれば移住のハードルが少し下がるのではないか。

委 員) 古民家ばかりの空き家だったらよいが、現状はそうでもない。

委 員) 所有者が1件だけの土地もある。

委 員) そのような土地もあるが、水面下で動くような話である。

委 員) やはり上場会社に売りたいとの話もある。

委 員) 阪急バスさんならどうか。

委 員) こんなに都市部に近い田舎は他にない。能勢町の宅地なら中古であれば500万くらいで買えるが、東京近辺にはそのような田舎はない。ただ、そこにローンをどれだけ組めるかが課題である。また、企業誘致についても最終的に頑張って企業誘致したところが頓挫した。

委 員) 能勢町には現状で空き家が194戸あり、丹波篠山市の業者が買いに来ていた。田舎暮らし

を薦める業者はたくさんあると聞いている。地方創生の話からいくと、幼稚園や小中学校が廃校になっているところがいくつかあるが、廃校の体育館で活動するなど使うことはできないかとの希望をよく聞く。例えば休耕地を借りたい人に貸す貸農園は、未来に農業をつなぐ能勢チャレンジにはならないか。また、いきがい活動ステーションは生物多様性で能勢町は全国一であり、里山クラブをつくるのはどうか。能勢町では活動がたくさんできると思う。例えば、能勢町は野菜がたくさんあるので、これを母子家庭や学生の方に提供したり、育ててもらうなどの活動があつたり、地盤産業、お酒、そのような能勢特有ならではの野菜を育てて PR していくということもしてはどうか。あるいは、能勢町は京都と大阪の真ん中にあって関係を持ってきたという、そのような歴史の知識を広げるようなクラブを作つてはどうか。また、PC の使い方を学べるといったことや防災活動といった地域の活動を大事にしていくことも重要である。食品ロスを減らしてはどうかということで、そのような活動も考えられている。

副会長) 時間も迫つてきているため、本日のまとめに入る。画期的なプロジェクトを行政に作つてほしいということで、アントプレナーシップ教育（起業家教育）というものがある。これは外部から起業やプロジェクト実施の教育をしてくれる人を呼び込むとうものである。

委員) 地域からの問題点をたくさん掘り起こしていただいたが、これを拾いこんでいく必要がある。何ができるのかということについては、身近なものは町が行政としてしなくてはいけないと思う。また、外部から呼ぶとしても、動くのは私たち地域の人間である。

副会長) 身近な問題については、町の方から動いてほしいというご意見かと思う。

委員) やはり外部から人を呼ばないといけない。

委員) 外国からの企業の研修生を呼び込むという話もよく聞く。例えば福祉施設で働いている人の半数近くは外国人ということもよくある。そのような多様な人が働くことも今後あるのではないか。

委員) 雇用やイベント等で外国人の方がおいでになる状況化がこれからもあると思う。そのような状況を見据えてしっかりとと考えながら施策を行わないといけない。たくさん的人が能勢町に寄つてくるという状況になった中ではどのようにしなければならないのか。例えば空き家関連の話にしても、各施策が連動的に動くようにしなければならない。一人一人の生き方というものがこれから大事になると思うので、そのようなことを大事にしていかないと将来の能勢町は失速していくと思う。

委員) 能勢町は今までのたくさんの施策をやられてきているが、失敗も多く経験していると思う。私が思うことは、「まとまらない」ということが全てである。そこで、町長が今回の公約の中で 840ha ある農用地のうち 40ha を企業誘致に取り組むと言っている。

委員) それは持続可能なのかということが気になっている。企業誘致としても一過性となり仕事はできるが、持続的にずっと続けられる産業を考えておかないといけない。企業誘致がどこにつながるかということがわかれれば、大きな効果を生むと思う。

委員) 今、バブルの時に開発ができなかつた土地がボンボンと花咲いている。川西市の企業誘致や猪名川町もゴルフ場の跡地開発で町が持つていた土地を無料であげて固定資産税を取ろうとしている。そのような土地が日の目を浴びている。

委員) 誰かが動いたら良いと思うが、動かざるおえない状況を作つてほしい。

委員) 土地の値段もあると思うが、これはどのようになるかわからない。川西市の IC 付近は高

いと思うが、能勢町はもっと下がる。しかし、能勢町の人は困っていない。企業誘致をしなくても良いと感じているのかもしれない。

委 員) 土地の一部を駐車場にして、農業をやっている方がいるが、土地が売れない状況と聞いている。理由をお聞きしたところ、不便でこんな土地はいらないということが多いとのことである。そこに問題があると思う。

委 員) 先ほどの東山辺の国道の話であるが、国道沿いも開発できたら利便性が上がると思う。

委 員) 能勢町の土地は質が高いし、運用するにしても先祖代々ということもあるから気軽に動かせないという人もたくさんいると思う。

委 員) 先ほどの農園を借りるというニーズはあると思うが、企業が土地を借りるというニーズはあまりない。借りるのであればいらないという意見が多い。借り手が多くいれば土地の値段は上がってきそうな気はする。

委 員) やはり実際に何も動けないということが、能勢町の不満である。

委 員) 能勢町の人は皆迷っており、将来を心配していると思う。それは何故なのかということはわからない。先ほどアントプレナーシップ教育というものをお聞きしたが、10年単位でプロジェクトを作つて動いてくれる人と契約できないか。全部お任せという形でもよいと思う。ただ町民も作る人も10年先のことはわからない。

副会長) 将来が不安であり、中々一步が踏み出せないという気持ちはよく理解できる。しかし、そのような部分を踏み越えないと変わらないのかもしれない。わからないからこそ踏み越えないといけないが、踏み越えるならどのようにしたらよいか。

委 員) それを是非、アントプレナーシップ教育などで教えてほしい。

委 員) 専門分野の知識を有する人との引き合わせて頂くようなことはできないか。

副会長) 時間も近づいてきたので終わらないといけない。「土地利用をどうするか」ということと、「能勢町には資源がある宝の山だ」ということが議論として上がっていた。しかし、行政や町民がまとまって動けないということが問題である。そこで外部から専門分野の知識を有する人を呼び込むアントプレナーシップ教育などの活用もあるのではないか。PRをしっかりしていけば、障害になっている部分の解決が望めると考える。

## ■C グループ

事務局) 前回議論が足りなかつた項目や、近年の事象、未来についてなどいろんなテーマが出てくるのではないかと思う。

### 【概要説明】

委 員) 栗の話をさせてもらう。当初は能勢栗栽培が盛んであったが、現状は荒れ地の栗山が増えている。今管理する人自体がいない状況である。行政に栗山の一括管理ができる仕組みがあれば銀寄もあるいは復活できるかもしれない。ただ銀寄だけでなく農地もここ10年先には担い手が減少していく。ある資源を有効的に生かしていくことが大切だから行政が中心になるのか、商工会なのか、若者なのか見当はつかないがその辺を強化できればと思う。

事務局) 委員は栗山をお持ちか?

委 員) 米づくりはしている。栗は空地に家族が食べる分しかない。

委 員) 獣害被害が問題。栗は病気になるし枯れてしまうこともあるから、知識のある人間が管理しないといけない。世界遺産はハーダルが高い。

- 委 員) 栗農家はどの程度いるか。
- 委 員) いるのはいらっしゃるが、年配が多いし栗も老木が多い。
- 委 員) 専門性が必要か。
- 委 員) そうでもない。
- 委 員) 私は 12 年前能勢町に帰ってきた。実家は栗山を持っていたが大変荒れていた。栗の木も寿命が来ていた。さらに獣害もあって最初に対応したことは鹿の進入を防ぐ網を張る作業だった。寿命が来ていた木を世話して努力したら再生することができた。3 年前の洪水で半数がダメになってしまったのは残念だったが、栗の木の世話には手間が掛かる。剪定してその切った物は処分しなくてはならない。私は当初売る目的で栗を作っていたが、沢山取れ始めてから私の名前で道の駅にも出荷した。出荷しておられる方は年配者が多い。やはり出荷量も減っている。原因として考えたのが、いい栗を作っても商品価値が定まっている事だ。栗そのものを売るのは秋だが、独自産業として栗を位置づけるのか商品化に向けて目玉商品をつくるのか、栗をどう扱いたいのかを決めて流れを作っていくことが必要。商品化するのであれば指針が決まらないといけない。森林組合で苗木の配布もあるが、すぐに在庫がなくなってしまうから一本も手に入らない。予約してやっと手に入れても苗木がひとつもらえる程度。産業振興は名ばかりである。このような事を経験して能勢町の産業復興について災害を機に考えるようになった。
- 委 員) 農協でも栗部会があり剪定や世話の仕方の教育も行っている。
- 委 員) 私も何度か参加した。新規参入の方も何組かいた。
- 委 員) うちの栗は樹齢 120 年。毎年手を入れると、古い木のほうがおいしくなる。
- 委 員) 樹齢 10 年くらいで大きな実が取れても味がよくない。委員の言うように古木ほどいい実がなる。
- 委 員) 古木を守っていくことをしないと、栗の木がだめになって能勢栗が減ってしまう。栗の木は寿命になるとろりと枯れてしまう。
- 委 員) 例えば、木の管理を町の人でして、出来た栗の販売を企業にお願いする。こうした仕組みは可能か。
- 委 員) りんご園や梨園あるが、栗は収穫したらそのまま食べるわけにいかず、火を通して皮むきがあるので大変。口に入るまでが手間。
- 委 員) 食べるまでに手間が掛かるから若い人の栗離れもありそうだ。
- 委 員) 商品化がされていれば、すぐ口に出来るから喜ぶのではないか。
- 委 員) 手間で敬遠されるのは。
- 事務局) 川下側では価値が高いが、生産地では面倒な面が先にでる。アンケート調査の 5 ページに産業面の記載があるが満足度が低いのが現状。
- 委 員) 森林環境譲与税の件、能勢町は吹田市と連携している。吹田市の財源をうまく活用すれば良いのではないか。町内の若い世代は関心がないかもしれない。
- 委 員) 吹田市の数パーセントでも相当の人数のポテンシャルがあると考えている。田舎が好きで農業したいけれど仕事や学校などで動けない人に対して、能勢町に自分の栗の木がある、一年に何度か草刈や獣害対応をしてもらうような、関係を都会と作る事が必要ではないか。
- 委 員) 能勢町民だけですべてを担うことは困難。一緒にやっていく連携が必要である。
- 委 員) 栗だけではなく、農地も同じく荒れている。空き家もしかり。人を呼んできて人口を増や

す、定住は出来なくてもマンパワーだけでも農業や林業で人を呼び込む。ずっと住まなくともよい。農業がしたい人は収穫物が成果として手に入るし、手が回らず土地を荒れ放題にしていた農地の持ち主も強いては能勢町全体も、荒地が減り助かる。畑は川西から通われている方も多いと聞く。ぶどう栽培も増えていると聞く。隣接の亀岡市もぶどう栽培が盛ん。ぶどうは気候に合っているのだと思う。能勢町の中の人だけで運用し守っていくのは難しい段階に来ている。外の人の力を借りていく手段も考えなければならない。

委 員) やはり旗振り役が必要。行政が前に立ってもらえれば。

委 員) 能勢町に暮らして先祖伝来の土地を継承して、楽しく暮らしている方の印象はあまりない。

昔は財産として継承したが現在は疲弊している印象を受ける。土地を持っている人は乱開発を当然嫌う。能勢町が乱開発されるのは避けながらも、定住できなくても何らかのマンパワーを外から借りて収穫物で払う。土地の持ち主は土地が荒れないメリットがある。やり方を考えて「乱開発はいやだが土地が荒地になるのは困る」、「守りながら、荒地にしない」というアンバランスなところを解消しなければならない。

事務局) 【地域の取組み紹介】

委 員) 私の実家は能勢町に田畠や山の無い家なので、能勢の農業の状態を知らない。よく言われる「興味のもてない若者」の一人かもしれない。能勢高校に通っていたので農業の教育の時間もあったが、農家ではないので学問としての情報でしかなかった。現在、弟が栗塹に通っている。能勢高校の生徒や卒業生も楽しそうに講義を受けているのを聞いている。それだけが職業にならないから若い人が能勢に残るかといえばそれは難しいのではないかと思う。

事務局) ほかのテーマはないか

委 員) 観光協会。野外活動センターでは冒険の森を誘致してはどうか。冒険の森以外の誘致も考えられるのではないか。

委 員) 夏休み春休み、土日は人が多く来られている。モンベルのようなアウトドアの中核企業と協力をして波及効果が望む事は出来ないか。能勢の子が能勢で遊ぶ機会が少ない。能勢の子は休みには逆に都会に行きたい、都会の子供は田舎に探検に行きたいなどの逆の現象があるので呼び込む策を考えるべきである。

事務局) 数年前よりはカフェが出来たりして賑わいも出てきているが人の呼び込みに対して、足りないところなどがあれば教えてほしい。

委 員) 沢山お店も出てきたが予約制のお店が多い。急に行きたいなと思って足を運んでもお店が空いていない。

委 員) 能勢町で毎日お店を開けると採算性がとれず、予約や週に3回などスポットでの営業になる。事業所はどこでもそうだが毎日空けても採算が取れない問題がある。鳥取県の大江ノ郷は卵だけで集客し、駐車場が満車になる。特産のたまごをもとに加工食品がどんどん登場して、卵を使ったパンケーキを販売して盛り上がって、そのパンケーキの為に他府県のナンバーの車が一杯来るすごい集客力を見せている。能勢の栗にその力がなぜないのかと思う。

事務局) 鳥取県の大江ノ郷は6次産業化によって観光地化した。卵に違いがあるのか。

委 員) 平飼いの鳥。一軒の農家が始められたようだ。それがどう波及したのか詳しく調べる価値はある。

- 事務局) 町内にも養鶏農家がある。地元のプリンもある。
- 委員) いい商品があるならば集約化したほうがよい。
- 委員) 卵だけではなく、野菜もセットで販売されている。
- 委員) 道の駅みたいな感じではなくて、もっと製品化されていてレストランもある。お客様もそこだけを目指して来る場所になっている。能勢町よりも農的な町でありそこ以外の目的地が無いのに集客が出来ている。
- 委員) 集約するにもやはり、旗振り役が必要だと思う。
- 委員) 能勢はカフェも町内にあるが、車がなければ移動ができない。はしごが出来ないくらい店と店に距離があるから、食事して少し歩いて散策してカフェでお茶してまた散策する事が出来ない。子供たちだけで遊びに来た場合、足がバスしかない。そしてバス降りたらまた次のバスまで待たなくてはいけない。ひとつの場所でしか遊びができない、Aの場所行ってからBの場所で遊ぶ事が出来ない。例えば、冒険の森にいかれる方も、周遊せずにバスで山下駅に戻ってしまう。
- 委員) レンタサイクルもあるが、そこまで行くのが大変である。
- 委員) 冒険の森から野間の大けやきまでは自転車で行けない。足の無い人はタクシーを借り切るなど、ストーリーをつくることで店舗の連携ができるか。例えば目的の品を三つあつめたらキャンプ場で美味しいもの食べられるとか面白いかなと思う。
- 委員) 能勢の郷が再生できれば。テニスコートもあるし、何かしてから次の目的の変更に対応できるのではないか。
- 委員) グランピングが流行っているが能勢町ではどうだろうか。
- 委員) キャンプ場はやっている。山辺周辺は盛んである。
- 委員) 山田地区でサバイバルゲームに活用されていると聞く。結構大人の方が来ている。
- 事務局) 屋外でできるフィールドは他にあまりないようである。
- 委員) 個々で活動されているがそれぞれに繋がりがない。
- 委員) サバイバルゲームをやっている人なら、能勢町でこんな遊びが出来ると知っている人もいるが一般には浸透していない。
- 委員) 能勢に来るとこんな遊びが出来るとの紹介が載った観光マップなどは発行していないのか。
- 委員) 観光協会でも発行している。
- 事務局) 冊子にはなっている。最近はネットで検索するが、お店はでてくるが一日の過ごし方がわからない。
- 委員) 情報はあるが横に繋がりがない。
- 事務局) テレビで取材が入ると反響が多くあり週末には人が多く集まってくれる。オオクワガタを販売している能勢町の「フジコン ワールド インセクト ショップ」も知る人ぞ知るスポットである。能勢町は知らないけれどお店の名前は知っているような光る物はある土地である。
- 委員) 趣味や知識が尖っている方はつながりを求めていないのか。
- 委員) そのような方が多いかもしれない。
- 事務局) 能勢町の将来像のイメージがあれば聞かせて欲しい。
- 委員) 能勢はいい所が在るのは、こうして議論の中で気がつくことができたが、住人は町の魅力をあまり知らないのではないかと思う。自分の町だと思えるように能勢の魅力をみんなが

知るべきだと思う。

事務局) 足元にありすぎて見えていないのか。

委員) 自分の場合は、能勢の地でやりたいことを貫いた。夢が抱けなくなっているのか。

委員) 能勢にはおいしい食べ物がある。能勢町に買い物するところはボックスしかないけれど、都会からボックスに通われる方もあるくらい。外の人に言われたのが能勢の人は口が肥えていると思うといわれた。美味しい米、山の中なのにボックスには新鮮な魚も仕入れられていると。「能勢には美味しいものがある」これを守るためににはやはり農業は能勢町の将来の為にも守っていかねばならないものだと思う。美味しい米を作るためには今のこの環境を守らなければならない。水をきれいに保ち乱開発を防がなければならない。すべてに繋がっていると思う。一家の台所を預かる身としては元気に生きていくためには食は切り離せない大切なことである。

事務局) 日本の中でも、能勢町は有数の食材が揃う土地。

委員) 発信することが大切。買って食べてみた人は「能勢の食べ物は美味しい」と知ってくれるけれど、ここからそれを発信して知つてもらわなければいけない。これだけインターネットが発達して現地に行かなくても取り寄せも手軽に出来る世の中になった。知つてもらう機会がないといけないから、発信していかなければならない。

事務局) 能勢のお年寄りは元気。基本になる食が関係しているかもしれない。

委員) 農作業で体を動かして、健康に気をつけて体操もしている。能勢町でできた美味しいものを食べているから元気なのではないか。

委員) 大阪府の会議に行っても「能勢町は美味しいもの沢山ありますよね」と言われる事が多く、能勢町といえば食のイメージは強い。来てもらって食べ歩きなどが流行っているが店がつながっていると、皆さん 1km でも 2km でも散策はされる。しかし能勢町は店がぽつぽつと点在しており、この距離を歩いて回るイメージがない。例えば、能勢の美味しいものを食べて回れるロードを整備する。プリンやお肉、野菜に栗を一箇所にまとめて土日、観光シーズン限定でもいいから周遊バスをだして西へ東へも足を伸ばせるようにできるのではないか。能勢町に定住者を増やすのはハードルが高いが、先ほど委員が言っていた様に、現状を維持しつつ外から人を呼び込むことはできるのではないか。例えば、高知の明徳義塾は有名であるが山の中に学校があって高校が甲子園に出ると土地も有名になる。能勢町は土地も沢山ある。全寮制の有名校が誘致できれば若者も集まってくれる。「能勢の新鮮で美味しい食材で体力が付き、甲子園に出場しました」などあれば夢物語かもしれないが町にも注目が集まる。学校関係者とも PTA で話が出ることもあり、そんな将来像もいいのではないかと思う。

委員) 教育機関の話。能勢高校を、例えば農業に特化した全寮制の高校にするのはどうだろうか。バイオ関係など特化したものが学校の特性にあると良いのではないだろうか。農業科のような特性があると能勢の農業を守る連携を取れる。全寮制にして寮を完備すれば能勢在住の子供だけでなく特化したものを学びたい子供が全国から集まってくれるかもしれない。

委員) 能勢町には職業の訓練をする場所も多くある。教育機関を誘致するというのは大きなことだと思う。

委員) 能勢町の子供たちは減っている。今年も定員割れしている状況。今さえ維持できれば良いのではなく、特化科を作つて日本中から呼び込む体制も必要ではないか。

事務局) やはり農業に特化か

委員) 能勢に多くの農場を生かせるから一番作りやすいのではないか。

委員) 私はエネルギーが専門なのでその観点から話をする。例えば、自動運転システムの実験は公道で試せないのが現状。しかし公道で実証したい企業が多くある。ここなら地の利が生かせる、自動運転の未来に携わる最先端にいる気持ちで受け入れる体制を作っていくはどうか。多少の不便があるかもしれないが、能勢町に研究機関が置けるのをアピールしていきたい。大学と連携することも見据える。そうすると大学生や研究者も入ってくるし、研究者が入ってくると新しい技術に子供たちも興味を持つ。こうした人を呼び込みたいのでぜひ地域の皆様にも協力を願いしたい。

委員) 土地は余っているから協力はできるし良い考えだと思う。

委員) 能勢高校で里山留学が開始された。現状ホストファミリー制度のような形で留学生の受け入れをしているが、今後、たくさん人を受け入れようすると寮が足りないと聞いた。寮を作るには寮を管理する人が必要でその整備も進んでいない状況と聞いた。寮が出来れば外部からの人も来る事ができるのにとは思う。

委員) 寮の管理一つとっても雇用に繋がるので考えるべき。

#### (4) 全体総論

会長) 白熱したディスカッションであった。それでは1、2分で各グループ発表していきたい

会長) (Aグループ) 銀寄をしっかりと守っていく事はSDGsもぴったりなので、進めてはとの話があった。ただ、生産者の高齢化の問題もあるので補強していくにはどうするかが課題。課題解決を考えるには、農業に関連してだけではなく子育て、交通などテーマごとに専門部署が調査結果を持っているので、少人数で深堀をして分析する機会を4月以降どこかで設けたい。子育ての話と銀寄栽培の話の両方に詳しい人が出てくる可能性など、課題と課題の結びつきなども考えるいい機会になる。4月以降、少人数で分析して農家に話を聞く、新規就農の方や移住してきた方への聞き取り調査をやる必要があると考えている。

副会長) (Bグループ) まず、「大阪のてっぺん」のコピーがキャッチャーでとてもよい。魅力があるがPRができていない。開発の話が多く出た。企業誘致など。しかし土地利用が出来ないなど何らかの障害があって進行できないのが多々見受けられる。それに対して突破口を見つけなくてはならない。何か画期的なプロジェクトを建てなければならないと意見が出た。実施するにも地権者の自体が纏まっていないので、行政の旗振りが必要である。外部から有識者や人材をつれてくるためには「能勢町が宝の山である」であるからそれを生かす力を貸して欲しいとの情報PRをうまく出していかねばならない。専門分野の知識を持っている人と連携協力して進める体制を作りたい。

委員) (Cグループ) A、Bチームと重複する課題もあるがまとめる。1つめは農業。能勢栗「銀寄」の話が出た。これまでの「植え、育てよ」だけでは上手くいかない。生産した栗の売り方や、能勢町のなかの人だけで栗の木を守って世話をするのが難しいなら、都会の人たちに年に数回の草刈や剪定の参加をしてもらいマンパワーを貸してもらう施策や、管理を町でやるとの案が出た。これは栗だけではなく農業すべてにも関わってくるのではないかと考えるべき課題である。2つ目が観光の話、「冒険の森」が頑張っている話を聞いたが、それだけではもったいない。冒険の森に言ってから別の場所にはしごしたくても能勢は店

やカフェが点在していて難しい。鳥取県の大江ノ郷のように卵を名産にして卵から派生させたパンケーキを打ち出し田舎であるが大きく集客しているのを参考にしてはどうかとの意見があった。それを参考にしながら能勢の美味しいものを繋げてストーリーを作る。そのためには横のつながりが重要である。観光に来て「能勢町で一日過ごす」観点が難しい。周遊モデルケースが必要。3つ目が能勢町の将来の話、能勢には広い敷地がある。例えば有名な高校野球が強い高校とかを誘致すれば、学校を通して能勢町を全国に知って貰えるかもしれない。能勢高校に何か特化した学科を作りとがったところを一つ作っていつてはどうかと意見が出た。関連してエネルギー関連で、人口が少なくなつて高齢化が進む地域だから出来る実証研究、例えば自動運転の公道試験場などを呼び込んでいくのをどうか。

会長) 次回以降について、進め方で提案やご意見はあるか。事務局から何かあるか。

事務局) 基本構想は年度中にある程度めどを立てていく。前回示した第5次基本構想のイメージを基に、たたき台を作っていく。たたき台から委員の皆様に意見をいただいて文面に落とし込んでいく作業に入っていきたいと思う。

会長) この2回の議論で何か1つ突破口や、今までできなかつたことを何か実施しようとの共通認識が出来たのではないか。横と繋がっていこうとの案が出ているのは前進。あと、少し役割について協力関係を作っていく事を謳わないといけないかと思う。考え方、思想を盛り込もうなどの、案をもってきていただければ幸いである。4月以降のアイデアもあれば是非出して欲しい。別の地域の成功モデルの取り組みを学ぶなど、今後持ち寄る事が出来れば良いと考える。

副会長) 総論的なところをまとめることが総計では大事。突破口を描けなくとも努力したことは大事で次に必ず繋がる。問題に対する突破口とは何だろうと抽象的だったものを具体にすることが重要だと思う。

会長) 4月以降、何か月かはチームを作って、調査をして、住民の方や各専門に取材にいくとか、そのようなやり方も取りたいと思う。他に何かあるか。

委員) 専門と言うなら、企業誘致や空き家、農業や特産、人材、生物多様性を守る里山クラブなど、地場産業を生かし、多くの人がそれぞれ色んな活動を行っている。

会長) ものすごく活動実績があると思う。いろんなところに出向いて調査ということも良いと思う。それでは、事務局にお返しする。

## (5) その他

事務局) 次回の日程調整をさせていただきたい。2月27日(土)午前10:00開催したい。

### ・閉会

以上